

令和5年12月22日

令和5年度東京海洋大学一般選抜（前期日程）等における入試ミスについて【最終報告】

国立大学法人東京海洋大学

I. 本事案の概要

令和5年2月25日（土）に実施した海洋生命科学部及び海洋資源環境学部の令和5年度一般選抜（前期日程）及び私費外国人留学生特別入試の化学基礎・化学の試験問題、物理基礎・物理の解答例について、令和5年6月9日（金）に、大学入試の過去問を取り扱う出版社から、化学については試験問題の設問に誤植、物理に関しては解答例についての疑義があるとのメールによる照会があり、該当科目の試験問題作成・採点委員及び点検委員によって、照会内容に合わせて確認を行うこととなった。

化学試験問題の誤植ではないかとの指摘に対しては、試験問題作成委員等により内容を確認した結果、出題に誤りがあったことが判明した。

対応として、当該設問（大問Ⅱ 問9(3)（配点6点））について、海洋生命科学部及び海洋資源環境学部の一般選抜（前期日程）受験者数140名、私費外国人留学生特別入試受験者数5名の全受験者について正解として取り扱うこととした。この措置により海洋資源環境学部一般選抜（前期日程）で追加合格となる受験者が1名発生することとなったが、当該受験者については、本学の海洋資源環境学部一般選抜（後期日程）で合格し、入学していることが確認された。

物理の解答例に関する疑義に対しては、試験問題作成委員等の確認後、疑義に対する説明を出版社に理由などとともに説明し理解が得られたが、出版社への回答に際して、念のため全答案の採点内容について確認したところ、1名の受験者について正答とすべきところ、減点していたことが発見された。

具体的な内容については、大問Ⅵ(1)(3)(4)（配点28点）において、一般選抜（前期日程）受験者76名のうち、海洋資源環境学部受験者の1名に採点誤りがあったもので、上記の3つの設問で正解とすべきところ、各2点ずつ計6点減点していた。なお、この採点誤りによる合否判定への影響はなかった。

本学としては、本事案について、令和5年7月7日（金）に公表し、直ちに追加合格者への対応を行いつつ、化学及び物理における入試ミスの要因の調査・検証及び再発防止策について検討するため、同年7月18日（火）に、全学入学試験委員会の下に、「令和5年度一般選抜（前期日程）等における入試ミス検証・再発防止ワーキンググループ」（以下、「ワーキンググループ」という。）を設置した。ワーキンググループでは、検証・再発防止策について検討を行

うため、8月10日（木）から12月15日（金）にわたり、計5回開催し、検証・再発防止策について検討取りまとめを行い、全学入学試験委員会に報告し、本学としての再発防止策を決定した。

II. 令和5年度一般選抜（前期日程）等における入試ミスの検証について

ワーキンググループでは、関係資料の調査に加え、試験問題作成委員、点検委員に対して令和5年9月4日（月）から11日（月）にかけてアンケート調査、令和5年10月17日（火）から27日（金）にかけて聴取調査（ヒアリング）を行い、事実関係を調査整理し、化学の出題誤りと物理の採点誤りの経緯と原因について、以下の点から検証・取りまとめを行った。

- ・試験問題作成・点検等の各業務の手引きに当たる「海洋生命科学部、海洋資源環境学部 学部入試試験問題に係る委員の役割について」（以下「委員の役割について」という）の活用状況
- ・試験実施（試験問題作成・点検）の体制、委員の役割分担及びチェック方法
- ・原因と再発防止策について
- ・その他（委員選出・構成、環境等）

1. 出題誤りの検証について（化学）

（1）試験問題作成の体制、点検方法、経緯

① 化学の試験問題作成の体制について

ア 試験問題作成委員

関係学部の教員で構成。

・役割分担

試験問題作成主任、試験問題作成主任補助（次期試験問題作成主任）、それ以外の試験問題作成委員数名

主任及び主任補助以外の試験問題作成委員は大問一題の試験問題作成を担当する。

試験問題作成主任、試験問題作成主任補助は試験問題作成委員会合の調整など庶務的なところから、全体の統括のほか、全ての問題の点検までを行う。

イ 点検委員

関係学部の教員で構成。

・役割分担

点検主任、それ以外の点検委員数名

点検主任は点検委員会合の調整など庶務的なところから、全体の統括のほか、試験問題作成委員への指摘事項等の取りまとめなどを行う。なお、点検委員は委員全員で全ての試験問題を試解答し、確認している。

② 点検方法について

試験問題作成委員及び点検委員ともに、「委員の役割について」に基づき、試験問題の作成及び点検を進めた。本資料は、各選抜及び科目間で共通に行う手順や役割を定めた資料である。これを原則とし、各科目の人員体制や特性等に応じ、各業務が行わ

れている。

試験問題作成委員における点検・チェックは、全員で多角的に行うが、各委員の専門分野や時間的な制約等から、各問につき出題者、試験問題作成主任、昨年度に関してはプラス次期主任候補が重点的に行う体制で行われていた。

点検委員による点検においても、同様に点検委員全員で多角的に行われていた。令和4年7月29日（金）から入稿原稿完成までに3回、その後は試験問題作成委員と同じ回数(point check)の点検を行った。

③ 経緯

ア 試験問題作成

令和4年7月15日（金）に入試課からの試験問題作成の依頼を受ける前から、試験問題作成委員による素案の作成等の作業が開始され、依頼を受けた当日の7月15日（金）に当該試験問題及び解答例が入試課に提出されている。その後、入稿原稿完成の10月6日（木）までに作問チェックシート提出とともに試験問題作成委員の点検・修正が4回行われている。

原稿入稿後、印刷所からの校正紙による初校、再校の確認・修正が行われ、また、再校確認期間中、11月30日（水）に、試験問題作成委員、点検委員による一斉点検、このほか教育担当理事、学部長、学部入試委員会委員長による点検が実施された。

令和5年2月9日（木）に印刷所から納品されたのち、2月10日（金）に最終確認が行われた。

イ 令和5年2月25日（土）一般選抜（前期日程）試験当日

試験問題作成委員による試験時間中の受験者からの質問への対応とともに、試験問題の内容について点検を実施。

ウ 出版社からの質問と対応

令和5年6月9日（金）問合せ（1回目）

” 6月22日（木）回答（1回目）

” 6月23日（金）問合せ（2回目）

” 6月29日（木）回答（2回目）出題誤り、解答例の誤りの判明

(2) 原因

試験問題作成委員及び点検委員を対象としたアンケート調査及び聴取調査（ヒアリング）の回答から、次に示す①、②のそれぞれの事項が原因となったと考えられた。

① 点検について

当該設問は、数値を計算させる問題で、導き出した数値が解答例と一致していたため、正解を導き出せた、すなわち問題として成立していると判断し、問題にある「いくつよりも小さく」が誤りであることを見落とした。実際は「大きく」が正しかったものの、水溶液に硫化水素を加えれば pH は下がるとの先入観から、設問の問いかけ方や、解答例が正しいものとの思い込みが生じた可能性が高いことが確認された。

また、当該設問は、作問開始時点から提示され、検討されていた。先述の思い込みにより、試験問題作成委員及び点検委員から特に指摘されることはなく、問題として成立しているという認識で早い段階で「適切な良問である」との認識を各委員が持ったことにより、以後のプロセスで、設問の誤りが発見されることなく出題に至ったものと考えられた。

上述の見落としが起こった要因として、聴取調査において試験問題の難易度や捻り具合といった観点の質問をした際の回答として、主に計算が主体の平易な問題であるとのことから、試験問題作成委員及び点検委員による点検において、比較的簡単に数値が導き出せたことで、平易な問題であるとの認識を持ったことが、先入観や思い込みを増幅させてしまったのではないかと考えられた。

② 試験実施体制について

当該試験科目の出題構成は、「無機化学」、「有機化学」、「理論化学」の分野ごとで構成されていた。専門分野内での限られた人員体制の中での、特定の教員への負担や役割の集中、担当分野以外の問題への対応や新鮮な視点からのチェックの困難性などが指摘されており、これらのことが出題誤りやチェック漏れにつながった要因の一部になったと考えられた。

2. 採点誤りの検証について（物理）

（1）試験問題作成及び採点の体制、点検方法、経緯

① 物理の試験問題作成及び採点の体制について

ア 試験問題作成委員

関係学部の教員で構成。

・役割分担

試験問題作成主任、それ以外の試験問題作成委員数名

主任以外の試験問題作成委員は、大問一題の試験問題作成を担当する。

試験問題作成主任は試験問題作成委員会合の調整など庶務的なところから、全体の統括のほか、全ての問題の点検までを行う。

イ 点検委員

関係学部の教員で構成。

・役割分担

点検主任、それ以外の委員数名

点検委員は全員で全ての試験問題について試解答し、点検を行っている。

ウ 採点委員

試験問題作成委員が担当している。採点主任は試験問題作成主任が担当。

・役割分担

大問1題の採点につき複数名が担当する。

② 試験問題・解答例の点検及び採点時の確認について

ア 試験問題・解答例の点検

試験問題作成委員及び点検委員ともに、「委員の役割について」に基づき、試験問題の作成及び点検が進められた。

試験問題作成委員における点検・チェックは全員で多角的に行っている。

点検委員による点検においては、上記役割分担のとおり、全員が各回集まり試解答により試験問題、解答用紙について点検を行っている。

なお、解答例については点検時に存在は確認していたが、「委員の役割について」にも解答例の点検は記載されておらず、点検委員の役割と十分認識されていなかった。

イ 採点時の確認

出題者が採点を行ったあと、採点された答案を複数名がそれぞれ確認を行う。

なお、部分点の付け方などの採点基準については、採点時に解答例に加筆し、採点委員間で共有する方法を採っている。

また、採点時に疑義があった場合、試験問題作成主任（採点主任）に報告し、その指示に従うことになっている。

③ 経緯

ア 試験問題作成

令和4年7月15日（金）に入試課から試験問題作成の依頼を受ける前から、試験問題作成委員による素案の試験問題作成等の作業が開始され、9月1日（木）に当該試験問題及び解答例が提出されている。その後、入稿原稿完成期限の10月6日（木）までに4回の作問チェックシート提出とともに試験問題作成委員の点検・修正が行われている。

原稿入稿後、印刷所からの校正紙による初校、再校の確認・修正が行われ、また、再校確認期間中、11月30日（水）に、試験問題作成委員、点検委員による一斉点検、このほか教育担当理事、学部長、学部入学試験委員会委員長による点検が実施された。

令和5年2月9日（木）に印刷所から納品されたのち、2月10日（金）に最終確認が行われた。

点検委員においては、令和4年9月9日（金）の初回点検から入稿原稿完成までに3回、その後は試験問題作成委員と同じ回数(point check)の点検を行っている。

イ 令和5年2月25日（土）一般選抜（前期日程）試験当日

試験問題作成委員による試験時間中の受験者からの質問への対応とともに、試験問題の内容について点検を実施。

ウ 採点

一般選抜（前期日程）試験当日の令和5年2月25日（土）に実施し、当日に採点作業を完了した。

エ 出版社からの質問と対応

令和5年6月9日（金）問合せ

〃 6月19日（月）採点誤りの判明

〃 6月22日（木）出版社への回答

(2) 原因

試験問題作成委員及び点検委員を対象としたアンケート調査及び聴取調査（ヒアリング）の回答から、次に示す①、②、③のそれぞれの事項が原因となったと考えられた。

① 解答例の作成について

試験問題及び解答例の作成時点で絶対値記号を付ける、もしくはマイナス符号を付ける解答についても考えられていた。しかし、大学入試における文部科学省の高等学校学習指導要領で定められた教育内容（教科書に基づく）での解答例に基づき、複数考えられるもののうち、絶対値記号やマイナス符号がないものを代表的な一例とした。

その際、絶対値を付ける、もしくはマイナス符号を付ける解答も正答とする旨は確認されていたものの、採点基準等として明文化されず、十分共有されていなかった。

② 採点について

採点に当たっては、出題者が採点を行い、採点された答案を複数名がそれぞれ確認を行った。

その際、解答例を参照し、採点を行っていたが、ほとんどの解答は絶対値、マイナスのない「q」であり、絶対値記号、マイナス符号の付いた解答はそれぞれ1名ずつであった。絶対値の解答は正解として採点したが、マイナスの解答については誤って減点してしまい、他の採点者と採点基準としての改めでの共有が不十分であったこともあり、結果的に採点ミスを見落とす原因となったと考えられた。

③ 試験実施体制について

採点期間は非常に短期間での処理が求められることや、疲労が蓄積し、採点の人員が限られている状況下で受験生の答案から採点基準を精査し、さらに全員で共有の上、チェックすることが困難な状況であったこともチェック漏れにつながった要因の一部になったと考えられた。

作成委員・点検委員間でのやり取りを書面で実施することが基本となっているため、指摘事項・回答の意図や内容が相手方に誤解無く伝わるような記載に努めることも必要である。【c】

(2) 試験実施体制について 【b、d】

- ・特に試験問題作成主任の業務の負担が質・量ともに大きいことから、入試の秘匿性に配慮しつつ、委員選出のための情報提供整理(担当可能教員・履歴等のリストの作成)、主任のローテーション制や複数年の委員のシフトの作成、入試業務担当教員の育成の取組を行うなど、試験問題作成委員及び点検委員の確保、その固定化防止に努め、部局及び教員グループ内での協力・支援体制を引き続き実施し、ミスの誘因とならないよう努めることが必要である。

(3) 解答例の作成について 【c】

- ・現行の「委員の役割について」では、解答例の作成・点検についての役割等が明確に示されていないため、作成・点検委員双方の役割等について明確化する。
- ・試験問題及び解答例作成段階で複数の正答パターンが想定された場合には、予め可能な範囲で明文化する。
- ・解答例の点検も点検委員の役割として明確に位置付ける。

(4) 採点について 【d、e】

- ・今回の事案を踏まえ、現行の「委員の役割について」の採点時のプロセス・役割等の具体化を図る。
- ・採点時における採点基準の全員での確認・共有。
- ・採点時の疑義は、必ず主任に報告・確認し、対応を協議の上、採点者間へ随時の共有。
- ・同一設問の答案について、「可能な限り複数の委員で採点を行う」から「複数の採点委員で採点を行う」体制に改める。

(5) 作業期間の確保について 【b、e】

- ・出題誤りや採点誤りとは直接関係しないが、各プロセスにおける作業期間は非常に短期間での処理が求められることが教員の負担につながり、チェックミス等の誘因につながる懸念がある。このため、入試課においても教員に対する試験問題作成の依頼時期を早めることや、当該年度の試験問題冊子等の印刷に係る作成スケジュールについても早めに委員へ知らせるなど、委員が計画を早期に立て、各プロセスの作業に対して余裕を持って取り組むことができるよう、サポートに努めることも必要である。

IV. 全学的な再発防止策

本検証及び具体的な再発防止策の策定に先立ち、全学的な再発防止策として令和6年度一般選抜等に向けて、以下の取組を全ての試験科目の入試業務において導入・着手する。

- ・過去問の有効活用。
- ・試験終了後に、学外者(予備校等)へ問題・解答チェックを依頼し、合否決定までのミス発見につなげる。

V. 今後の検討

ワーキンググループにおいて、アンケート調査、聴取調査（ヒアリング）の結果を踏まえ、前述のⅢのとおり多面的に検討し、現時点で実行可能と考えられる対策を提案した。さらに、今回の調査の過程で得られた意見に基づき、今後、全学・各部局で入試制度の改善・充実を中長期的な視点からも検討していくことが必要である。

VI. 参考資料

1. 令和5年度一般選抜（前期日程）等における入試ミス検証・再発防止ワーキンググループの設置について

令和5年7月18日
全学入学試験委員会

令和5年度一般選抜（前期日程）等における入試ミス 検証・再発防止ワーキンググループの設置について

1 設置の目的

令和5年7月に令和5年度海洋生命科学部及び海洋資源環境学部一般選抜（前期日程）等において出題誤り及び採点誤りが発見され、点検修正後に改めて合否判定を行った結果、海洋資源環境学部一般選抜（前期日程）において1名が追加の合格者となった。

今後、同様の入試ミスを発生させないためにも、出題誤り及び採点誤りが発生した原因について解明し、再発防止策を検討する必要がある。このため、全学入学試験委員会の下に専門的な調査審議を行うための小委員会（ワーキンググループ）を設置することとする。

2 主な検討事項

- (1) 出題誤り及び採点誤りの原因解明
- (2) チェック体制の見直しを含む再発防止策の検討

3 設置期間

ワーキンググループは、2の主な検討事項に関する審議が終了したときに廃止する。

4 構成員

- (1) 海洋生命科学部入試委員会委員長
- (2) 海洋資源環境学部入試委員会委員長
- (3) 全学入学試験委員会委員長が指名した者
- (4) 学務部長

5 その他

ワーキンググループにおいて検討結果を取りまとめた際には、全学入学試験委員会に報告するものとする。

2. ワーキンググループ名簿

令和5年度一般選抜（前期日程）等における入試ミス 検証・再発防止ワーキンググループ 名簿		
役職等	氏名	備考
海洋生命科学部入試委員会委員長	中原 尚知	◎
海洋資源環境学部入学試験委員会委員長	山中 寿朗	
全学入学試験委員会委員長が指名した者	矢澤 良輔	海洋生命科学部海洋生物資源学科
全学入学試験委員会委員長が指名した者	小山 智之	海洋生命科学部食品生産科学科
全学入学試験委員会委員長が指名した者	大縄 将史	海洋資源環境学部海洋環境科学科
学務部長	小野 耕志	
◎…主査		

3. ワーキンググループ会議開催

第1回 令和5年8月10日（木）

第2回 令和5年10月4日（木）

第3回 令和5年10月17日（火）～10月27日（金）聴取調査

第4回 令和5年12月11日（月）

第5回 令和5年12月13日（水）～12月15日（金）書面審議